
魔法少女リリカルなのはStrikerS～お荷物と呼ばれた男～

橘 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS～お荷物と呼ばれた男～

【Zコード】

Z0414P

【作者名】

橋 葵

【あらすじ】

管理局内で「お荷物」と呼ばれる青年。そんな彼には秘密が…。魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次小説です。こういうのが苦手な方は読まないことをお勧めします。

主人公はデバイスなし。チート能力だけを駆使して戦います。

行き当たりばったり最高ーー！

そんな小説です。

「は？？もう一回言つてくれないッスかね？」

一人の青年が、自分の目の前に座つて、三人の老人を見ながら聞く。

その青年は髪は短髪ではあるがぼさぼさで、とても清潔感があるとは言えない。

顔も何処となく疲れたような顔をしており、胡散臭さが漂つ顔つきをしていてお世辞にもカッコイイとは言えない。

良くて中の下あたりである。

その青年は目を丸くしながら老人たちを見つめ答えを待つ。

その目は「嘘だと言つてくれ」と訴えてくる。

「ちゃんと聞いてなかつたのかの？」

だからお前には機動六課に行つてもうつと云つたのじや。」

「どうとうボケやがつたスか？」

「失礼な…ボケちゃおらんわい。

ちなみにこれは決定事項。

ついでに言えばいつものようなお願いではなく、命令じや。

青年にぼけ老人扱いされた、真中に座っている右頬に傷のある立派な白髪を蓄えた老人、

ラルゴ・キール武装隊名誉元帥が言つ。

「何で俺がそんなエリートの集まりみたいにこに行かなくちゃいけないんスか！？」

絶対いやッス！！

だいたい俺が周りからなんて言われてるか知つてるでしょ！？が…！」

「知つとるがもう決定したことじや。諦めて逝つてくれ。」

「逝くの文字が違うッス。」

青年に死刑宣告したのはレオーネ・フィルス法務顧問相談役。

「まあまあそう言わないで。

だいたいその言い訳を私たちにするのは間違っているのじゃないか
しら?

私たちに言われて力を隠しているのですから。

あなたの力は私たちが一番知っているわ。」

やんわりと青年を諭す人の良さそうな老婦人。

ミゼット・クローベル統幕議長である。

どうやらこのさえない青年は伝説の三提督直々の任務を受けている
らしい。

しかし青年はかなり嫌がっている。

「確かにそうッスけど……。

といふか、なら他の人にすればいいじゃないッスか。

表で「お荷物」だの「落ちこぼれ」だのその他諸々言われている俺より、良いのいっぱいいるでしょうが。」

「どうも管理局の上層部が怪しいのよ。

あんまり疑いたくはないのだけれど、やはり私たちが信頼できる人の方が安心できるでしょう?」

「そうシスけど……。

そうシスけど……。

うう~分かったッスよ。

行けばいいんでしょ。

行けば。」

「あなたならやつぱり聞いてくれると思ったわ。

ありがとうね。」

青年は何とかしてこの任務を受けまいと必死であったが、三提督が折れないと悟ると諦めたように任務を引き受けた。

「んで？」

行つた所で俺は何をするんッスか？

言つときますけど俺は隊の仕事しないッスよ？

ばれたら困るッスから。」

「そのことだが…。

今まで隠すよつてきたが、これからは多少なら力を使っても構
わん。」

「それは俺が表舞台に出ることになるんッスけど…。

分かつてるッスか？」

「無論じや。

そのためにお前には今までオーバーランクの任務ばかりやらせ、
知名度を上げてきた。

今やお前の一つ名を知らん者はおらん。

すべてはお前を誰にも縛らせないため。

「

「わしらの権力がいかに強かるつと限界がある。

そのためにお前自身に権力を着けさせた必要があった。

お前が利用されないみつこ……。」

「そしてあなたは力を手に入れた。

もつあなたは利用出来るような子ではないわ。

だからそろそろあなたがあなたとして活動しやすこよつて表に出る
べきなのよ。」

三提督は優しい田で青年を見ていた。

それは成長した我が子を見守る親のような田であった。

「わかつたッス。

でも基本的には隠したままでいへッスよ。

敵が内にいるなら隠し玉は多いに越したことはないッスから。」

「その判断はあなたにまかせるわ。

では早速だけじ明日、機動六課の部隊長の所に挨拶に行って来てね。

明後日には六課に出向となるから。」

「了解つす。

あと今俺が行つてるレジアス中将の調査つすけど、ロッサに回して下さいッス。

あいつが一番信用出来るッスから。」

「わかつた。

そのようにしておこつ。

くれぐれもあの娘たちをよろしく頼むぞ。

三提督直属特別遊撃部隊「LAST CARD」《最後の切り札》唯一の隊員 刹那の処刑人 そして…我らが息子、一之瀬真（いちのせまこと）一等陸士よ。」

「恥ずかしいからその二つ名で呼ばないで欲しいッス。」

「氣をつけるのだわ。」

「体調崩さなこよつて」ね。

「分かってるのはスヨ。じゃあ言つてくのス。義父さん、義母さん。

」

次は真の目線で…。

今までの真。

protoype2 (前書き)

真の正体は...。

真 side

俺がこの世界に来てから早くも7年が過ぎたツス。

俺はもともとこの世界の住人ではないツス。

もつと言えばこの次元の人間ではないつすけどね。

俺がこの世界に来たのが19歳の時…。

前の世界ではしがない大学生だったツス。

まあ極度のゲーオタではあつたんツスけど…。

アニメと漫画も少々…。

でもまあそれなりに満足な生活をしていたツス。

将来もそのまま大学で資格を取つて、普通に企業に就職するか公務員になるつもりだったツス。

でもある日…

俺はくそ神様の気まぐれで…

この世界に来ることになったツス。

神さんはチート能力をくれてやるから、それを使って原作介入しようと言い出した。

最初は「はつ？」とかなったんスけど、でもまあ魔法少女リリカルなのはStrikerSの世界って聞いた時はテンション上がったツスね。

んで、神に願ったチートは俺が知る能力・魔法・魔術・道具の使用。簡単にいえば漫画やゲーム、アニメの魔法や魔術を使わせろってことツスね。

たとえばFateのアーチャーの【無限の剣製】とか【王の財宝】アーチャーの剣を無限に作れる魔力とか…。

でもさすがにそれはチート過ぎと言われ、3シリーズに限定されたツス

そこで俺は自分がもつとも詳しいと思う、Fateシリーズ・ティルズシリーズ・ネギまの3シリーズを選んだんツス。

その後普通に転送されたんツスけど、転送された場所が有り得なかつたツスね。

次元犯罪者のアジト。それもオーバー Sランクの。

生きるために必死だつたツス。

始めて人を殺したツス。

人を切つた時のあの感触。

人が焼ける匂い。

全てが気持ち悪くて、怖かつたツス。

何度も何度も嘔吐したツス。

その世界は次元犯罪者の巣窟みたいな世界で、生き残るために殺さなければならぬ日が続いたツス。

だんだん殺すことを割り切れるようになつた時、俺は戦闘術を身に着けていたツスね。

そのうちその世界では有名になつて、挑んで来る者もいなくなり殺さなくともいい日々が続いたツス。

そしてだいぶ落ち着いて来た頃、殺した次元犯罪者のアジトで転送ポートを見つけたツス。

それはクラナガンに繋がつていたツス。

正直泣いて喜んだツスね。

やつとあの地獄から抜け出せたつて…。

その後街を散策していたら、不良に絡まれておばーちゃんがいたんで、助けたツス。

正体を知つてびっくり。

ミゼット提督だつたんスよね。

お礼がしたいからなんでも言えつて言つから、素直に保護してくださいって言つたツス。

何だか良くなつてないようだつたから、これまでの事を一部ぼかしながら話したツス。

当然自分の能力のことも話したツス。

そしたらミゼット提督はキール元帥とフィルス相談役に俺を紹介してくれて、三人で保護してくれる形になつたツス。

最後の方には俺を養子にするとか言つてくれたんスけど、丁重にお断りしました。

何故かつて？

だつていい年こいて、三人が「自分の養子にする…」つて大喧嘩するんスもん…。

とにかく保護してもらつた俺はその恩を返すために管理局に入局したツス。

とりあえずは能力は隠せと三提督から言われていたから隠してたん
スけど、リンクアコアがないのに、魔導師扱いの俺は他の魔導師か
ら「落ちこぼれ」と呼ばれるようになつたツス。

それ 자체は良かつたんツスけど、陰湿な嫌がらせがめんどくさかつ
たツスね。

またこの頃から三提督の計画を手伝うために直属部隊を設立したツ
スから、自分の悪評は隠れ蓑になつて都合がよかつたツスね。

基本的に隊の事は極秘事項だし…。

部隊の任務はおもに2つ。

1つ目は管理局内部の調査及び浄化。

簡単に言えば裏から手をまわして失脚させる。

2つ目はオーバーランクの次元犯罪者の捕獲及び抹殺

これはそのままツスね。

捕まえるのが優先されるけど、駄目だつたら処理。

逮捕は難しいんスよ。

手加減しないといけないから、下手したらじつちがやられる。

まあそんなこんなで任務をこなしていくと、一つ問題が出てきたん

スよね。

まあ名前しか知られない極秘の部隊だから行動は基本的に夜。

しかも深夜帯に活動する。

そのせいか次の日は半端無く眠い…。

たいていは所属している隊の仕事は出来ないツス。

寝てしまつて…。

そのため俺は「お荷物」と呼ばれるようになつたツス。

それは何処の隊でも同じ…。

そうなるとだんだん仕事をする気も無くなつてきて、今では普通にサボつて自分から「お荷物」になつてるツス。

多分機動六課でもそう言われてるツスよね…。

まあばらじてもいいと言わてる分だけ、いつもより気持ちも樂ツスけど…。

まあ当分は「お荷物」を演じましょ…。

その方が仕事しなくていいから楽だし…。

でもまあ、原作介入は楽しみだな…。

よし頑張るツス！！

protoype2 (後書き)

真の過去を書きました。

なかなかまとめがうまくいかねッス…。

次は真のステータスを書きます。

オリ主紹介（前書き）

激チート野郎

その名は一ノ瀬真

オリ主紹介

プロフィール

名前 一ノ瀬 真（いちのせ まこと）

性別 男

年齢 26歳

身長／体重 170? / 63? 割とがっしりした感じ

性格 オタク。めんどくさがりで、サボり魔。自分に甘く、他人に
厳しいというダメ人間を演じている。

やる時はやる男。冷めたように周りを見ているが、いろいろ気にかけている。

他人に厳しいのもほとんどは、自分の経験から来るアドバイス。

しかし普段の態度や行動から誤解を受けやすく、相手を怒らせてし

まう。

好きなこと／もの 温泉巡り・おいしいもの・家族一（今は三提督）
・仲間

嫌いなこと／もの 仕事・管理局の腐った部分・自分や仲間の命を
大切にしない奴

能力 Fat eシリーズ・ネギま・テイルズシリーズの能力・魔法・
術・道具等の創造と使用

ちなみに全てノ コスト

集中力や体力は使うが、その他の魔力の消費や反動は一切ない。

その代わりに真にはリンクアーコアは無く、デバイスも使えない。
運動能力はもともと悪くはなかった上に、次元犯罪者と殺し合いを
している最中にアーチャー等の剣技等

の能力を使っていたため、いつの間にかアーチャー達の剣技等を体

得した。

今では能力無しでも十分強く、勝てるものはほぼ居ない。

見た目等 顔は下の上から中の下

はつきり言ってカツ「良くない。なかなかの残念野郎。

身長も高くもなく低くもなく。ただ戦闘ばかりしていたので戦闘に特化した筋肉が付いてがっしりしている。

「～ッス。」口調は殺し合いの世界の時に精神崩壊を犯さないよう本能的に明るくなろうとして付いた。

本人も人を殺した戒めと思っており治す気が無い。

オリ主紹介（後書き）

基本的にはオリジナルは主人公だけのつもりでいます……。

ヒロインは……。

どうしよう……。

episode1 出向の前（前書き）

本編1話

といひとう真が原作キャラと接触するか？

どうなることやら…

作者にも分かりません（笑）

それでは魔法少女リリカルなのはStrikers～お荷物と呼ばれた男～始まります

episode 1 出回…の前

sideはやて

「はあ～。」

管理局本局遺失物管理部機動六課部隊長室。

その長であるウチ、八神はやて二等陸佐は自分の田の前のモニターを見てはため息をついていた。

「どうしたですか、はやてちやん？すでに10回はため息ついてるですよ？」

ウチのユーバイスであるコインフォースツヅヴァイが心配そうに声をかけてくれた。

どうやらウチがモニターとにらめっこしてはため息をつこてる様子に、我慢が出来なくなつたらしい。

「ああ、ありがとなリイン。大丈夫や。」

ウチは何でもないように振る舞つたんやけど、明らかに疲れが顔に出ていたらしい。

「ホントになにがあつたですか？ひどい顔してるですよ？」

そんな顔のはやてちゃん見たことないですよ。」

「そんなひどい顔しとるか？ウチ？」

ウチはひどい顔と言われ、両手で頬を抑える。

「「失礼します」」

そこに一人の女性が入ってきた。

「なにしてるの？はやてちゃん。」

そう聞いたのは亞麻色の髪をサイドボニーにした可愛い女性。

元本局武装隊航空戦技教導隊のエース・オブ・エースで、今は機動六課のスターズ分隊隊長、

高町なのは一等空尉。

「やつだよはやて。なんか変な顔になつてるよ。」

と何気に毒を吐いた金髪の美女。

元管理局本局次元航行部隊所属の執務官で、今は機動六課ライトニング分隊隊長、

フェイド・T・ハラオウン執務官

「なんや一人してひどいなあ。ちょっとお顔のチェックしどつただけや。」

ウチは一人の言葉に傷ついたようにむぐれる。

しかしこいつものことなので、なのはなちゃんもフヨイトちゃんも軽く流してまづ。

「二二ちゃんは、ごめんね。」

「それではやで。何の用事だったの？」

「わうわわうわ。ちょっと二人に相談があるねん。聞いてくれるか？」

ウチは立ち上がりながら、一人にソファーに座るよう勧めた。

二人も顔を見合させてから、ソファーに座ってくれた。

「それで？相談つて何？」

「あんなこれを見てもういたいんやけど…。」

そう言いながらウチはパネルを操作し、一人の男の詳細が書いてあるモニターを出した。

「この人は……？」

疑問に思つたフェイドちゃんがウチに問い合わせてくる。

「明日からウチに来る新隊員や。今日挨拶に来るらしいわ。」

「えつ……。機動六課が始動したのは昨日だよ？」

「それにこの人って……。」

なのはちやんは知つてゐようやな……。

「なのは、知つてゐの？」

「うん。噂だけは…。」

やつぱりな…。まあ本局やと有名人やからな、この人。

「なのはちゃんは知つとるよつやけど、まあ一応確認のために聞いてや。」

この人は一ノ瀬 真一等陸士。

年はウチらの7つ上で、26歳。

入局7年目やな。

その間にいろいろな隊に行つとるんやけど…。

この人の問題はここからや。

この人どこの隊でも仕事せえへんかったから、「お荷物」って言わ
れとるんよ。

ここまでなんかあるか?」

「そこまでは分かつたけど、どうしてそんな人がウチの隊に?」

自分たちで壇上つもりはないけど、ここは一応エリート部隊だよね？」

「アリやねん。相談したい事はアリやねん。」

そう言いウチはパネルを操作し、新たな資料を出す。

「じゃあどう見てくれるか。所属部隊の履歴のところ。」

「これって……。」

「前の部隊がレジアス中将の……。」

「アリやねん。おれらレジアス中将のスパイ。もしくは嫌がらせ。

「どうせアリやないかせんといかん。」

「にかいに案あるか？」

「アリやん。」

一人とも悩みだす。

まあそりやうな。ウチもこの人の対処でため息ぱっかりやし……。

「ねえはやてちりゃん。」

「なんやなのはちやん。いい案浮かんだか?」

「多分会つて話してもないのに、いい案なんて浮かばないよ。」

「今日その人挨拶に来るんでしょ?」

「なら会つて話してみてから対応考えようよ。」

「なるほど……。」

「理あるな。」

「百聞は一見に如かずつて言つしなま……。」

「はやい。」

私の考えなんだけどフォワードメンバーとして入れるのせうだりう。

それなら朝から訓練ばっかりだし、近くに私たちもいるし、監視もできると思うんだ。」

「それはええ考えや。でもどっちの隊に入れよつか…。」

「私が言つたんだから、ライティング隊の所属で良いよ。」

「ほなようじくたのむわあ。」

話が終わるとほぼ同時に受付から通信が入る。

『八神部隊長。お客様がお見えになつてしまますがいかがなさいますか?』

「意外に早かつたんやな。部隊長室に通してもいいのか?」

『わかりました。』

そう言つて通信が切れた。

「なにせうちはヒューマンアシスタントと一緒に元気いっぱいになれるんだよ。」

「うん。」

「もちろん。

さて鬼が出るか蛇が出るか……。

どうせ出でんと欲しけどなあ……。

episode1 出向の前（後書き）

原作キャラクと接触させようと思つたのですが、意外に長くなつてしましました…。

はやて白黒しろ…。（笑）

次回こそは接触させますので…。

次回もよろしくお願いします。

episode2 挨拶（前書き）

PV8900越え

ユニーク1300越え

ありがとうございます。

これを励みに頑張りたいと思います。

そして烈火の祝福様

「メントありがとうございます。」

初のコメントで感激しました。

また「メントをいただけると、とてもありがとうございます。」

それではepisode2 挨拶始まります。

episode 2 挨拶

「 いーじが機動六課ツスか…。」

「 でかいツスね〜。」

目の前に広がる新築の建物。

俺は今機動六課の隊舎の前に来てるツス。

正直あまりの広さに迷子になりそうツス。

「 とりあえず受付に行くツスか。」

「 すいませんツス。」

「 はい、なんでしょう。」

あつ、この人今俺の顔見て、渋い顔したツス。

なんだかへこむツス…。

「あの~。」

おつと、いけない。

とりあえず要件をつと…。

「明日から機動六課に出向となる一ノ瀬真一等陸士ツス。

今日は八神部隊長に挨拶に来たんスけど、取り次いで貰いたいツス。

「

「分かりました。

少々お待ち下さい。」

ふう、とりあえず待ちますか。

しかしこの隊おかしいんじゃないッスかね…。

ど「見ても美男美女しかいないってどういってど…」ヒッスか…!…。

自分が「ブサ」面だと自覚している俺には肩身が狭いッス…。

明日からこの隊か…。

鬱になりそうッス。

「はあ…。」

「お待たせしました…つてどうしました?」

なにかありましたか?」

「あつ、いやつ何でもないッス。

大丈夫ッス。」

「そりですか?」

ハ神部隊長がお待ちですの、部隊長室まで」案内します。

「いらっしゃります。」

「おとと行きませうか。

s.t. eはやて

ブー

どうせならまたみたいやな

「失礼します。

「どうぞ。」

「ノ瀬一等陸士をお連れしました。」

「おおきにな。

自分の仕事に戻つてくれてええよ。」

「分かりました。

それでは失礼します。」

カヒビウシヨガ…。

side out

side 真

「お初にお目にかかるツス。

一ノ瀬真一等陸士ツス。

よろしくお願ひしますツス。」

「 よつこ 」 と 機動六課へ。

ウチが 機動六課部隊長 の八神は やて や。

そん で こいつ に おる の が 」 。

「 高町 な の は です。

」 の 隊 で は 戰技 教導 と 分隊 の 隊長 を し て ま す。」

「 そん で こいつ に おる の が 」 。

「 フ ハ イト・テ スタ ロッサ・ハ ラオ ウン で す。

高町 教導官 と 同じく 」 の 隊 で は 分隊 の 隊長 を し て ま す。」

うわへめ ちやく ちやく 警戒 さ れ て る ツス。

ま あ しょ う が な い んス け ど ね 」 。

俺の 噂 聞 いて る だろ 」 。

「あの～みんなに警戒しなくても何にもしないっスよ？」

「仕事も頼んで…。」

「はう…。

部隊長の前で仕事しなこ直すかねとほんと度胸してくるな。

あと別に警戒しないわけやありくん。

「もともといつこいつ顔や。」

「やんなの嘘ッスー！」

絶対警戒してるッスー！」

「まあまあほやほややん。

まあほは落ち着いひへ。

「れかの事をひやんと話せなこと…。」

「やうだよほやじ。

「の後も仕事あるんだから。」

「やうやな……。

とつあべやくやるいじるやめをひとむ。」

た、助かつたシス……。

「わくとつあべやく——ノ瀬——等陸士。

畠田から田畠にしても、ひい畠田やナビ……。

やんと仕事せじてやひひで……。」

「無理ッス。」

「畠田——。」

「畠田。」

なり無理な理由をわざわざつぶやくもいなか……。」

「、怖いッス…。

といつか…。

あれ？

もしかしてこの人たち俺がリンカーノア無いの知らない…？

「あ、あの俺の噂知らないッスか？」

「聞いとるで。

仕事をしない「お荷物」魔導師つて。」

「あ…。

それだけッスか？」

「そうやけど…。

他になんかあるんか？」

なるほど…。

納得ツス…。

「えつと、もっと正確に言えば仕事ができないんツス。

俺リンクカー『ア無いんで…。』

あの…。

無言はつらニツス。

「「「ええつ~~~~~!」」」

あつ、やつと反応があつたツス。

「で、でも自分魔導師やろ!?

おかしないか?」

まあそれが普通の反応ツスよね。

リンカー・コアが無いということは魔力がないってことツスレ……。

魔力が無いとパネルとか出せないし、操作できないし……。

だから俺は「お荷物」と呼ばれてた訳ツスけど……。

とりあえず今はハ神部隊長に自分がなぜ魔導師登録なのか説明しないと……。

「モジツスよ。

リンカー・コアは無いけどレアスキルがあるんで、一応魔導師登録してるツス。」

「そうこうとかあ。

ということはデバイスも……。」「

「持つてないツス。」

「せやへどひつねや。」

「せつぱりフオワード難しいんじや……。」

「うん……？」

今聞き捨てならない事が聞こえたツス……。

「えつと……。

「誰がフオワードメンバ―として、ライティング隊に

「あんたや。」

「ノ瀬一等陸士にはフオワードメンバ―として、ライティング隊に所属してもらひうだ。」

「無……。」

「拒否権はないからな……。」

「ですよね～。」

「いやほやひちやん。

さすがに私も無理だと思つよ。」

「大丈夫や。

リンカー「アが無いのに魔導師登録されどいとはせや…。

おやりく一ノ瀬一等陸士が持つレアスキルは相当強力なもんや。

やないと普通はそんなことは許されへん…。

やつやね。

一ノ瀬一等陸士?」

「うわあ…。

れいじめんじくをこじになつたッス…。

じょうがないッスね。

1個だけ見せてそれをレアスキルとしよう。

どれがいいかな……？

ある程度強力な奴じゃないとばれるツスよね……。

うーん……。

よしあれにしよう。

この世界だと強力なはず……。

「確かに八神部隊長の言つとおりツス。

ただ戦闘には使えないツスよ？

対人ならまあ最強でしょうけど、対物だとほぼ意味無いツス。」

「最強言つたな……。

「それはウチらにも勝てるつちゅうことか？」

「まあ勝てるつすね……。

その証拠に……」

俺はネギまのエヴァンジロリンや「タロー」が使う影のゲートを使って隊長達の前から消えて……。

「「「なつー！消えたー？」「

「ビラッスか？」

ハ神部隊長の影から背後を取ったツス。

「「「えつ……」「

「いつの間に……。」

「全然分からなかつた……。」

「といふか身体が沈んだよね……。」

「これが俺のレアスキル【ゲート】ツス。

まあ簡単に言えば瞬間移動ツスね。」

まあ他にもあるんスけどね……。

「そら魔導師扱いにもなるわ……。

「んなん反則や。」

「でもこれにも弱点はあるんスよ?」

「1つは消えるまでに時間がかかる事ツスね。」

「その間は無防備ツスから。」

「そこを狙われるとびつじょうもないツス。」

「もう一つは【ゲート】の先で何らかの現象が起こる事ツスね。」

「影の【ゲート】なら影ができるし、水の【ゲート】なら水が現れるツス。」

「まあ基本は背後に回り込むんで関係無いツスけどね……。」

「確かに対人なら最強やな…。

背後に回られたらなんもできへんし…。

あれっ?

でも機械なんかもそうなんやないか?」

「【ゲート】自体はそんなんツスけど、問題は俺なんツスよ。

俺じゃ機械は壊せないんで…。」「

「そうこう」とかあ…。

しかしこんな事ウチらに言つて良かつたんか?

こんなレアスキル普通は極秘事項やろ?」「

「まあ俺をこの隊に行くようにした人からは許可貰つてるんで…。

大丈夫ツスよ。」「

数ある中の一つに過ぎないツスしね。

「それも気になつてんのや。

誰があんたをここに派遣したんや？

レジアス中将か？」

ああ、俺がスパイじゃないかと疑つてるんすね。

最初に俺を警戒してたのはそつちつすか。

「違うッスよ。

詳しい事は言えないッスけど、この隊を悪くしようなんて考えて無いッス。」

「信用してええんか？」

「もちろん。

この命をかけてもいいッス。」

「分かった。

聞きたい事も聞いたし、伝えることも伝えた。

よし、今日もひばり。

明日からひばりだ。

「はー。

みじくお願こしますッス。」

隊長達と打ち解けられた見たいでよかつたッス。

これなら明日からも…。

「あー、わざ。

戦闘訓練にはひばりと参加してもひばりな。

ひばりと覚悟しておこ。

一難去つてまた一難ツス。.

episode 2 挨拶（後書き）

ところがなぜか原作キャラとの絡みが…。

長かった…。

なるべく原作のキャラは壊したくなかったのですが、見事に壊れてしましました。

以後修正してこいつと思こますが、自分の文才で出来るかどうか…。

まあ頑張ります。

次回も見てやつてください。

最後にもじょんじょんれば、感想などもこただけんと幸いです。

よひじくお願いします。

episode3 出向（前書き）

いつの間にかPV20000アクセス突破

ユニークも2800突破

ありがとうございます。

そしてえんヴィー様

閻魔輪廻様

「メントありがとうございます。

ホントに励みになります。

これからも見守っていただければ幸いです。

それではepisode3 出向始まります。

episode 3 出向

side 真

とうとう出向の田が来てしまつたッス……。

今は機動六課の制服に着替えて部隊長室の前に立つるッス。

ビハーン。

す「」へ入りたくないッス……。

でもいつまでもひしているわけにもいかず……。

「はあ~。

しょ「」がない……。

覚悟を決めるッスよ真!!--」

意を決して……。

「何をしているの？」

「えつ、ちゅつと何?」

「なんだ？」。

ハラオウン隊長ツスか？。

脅かさないでくださいッス。」

「普通に想かけただけなんだけど……。」

それより早く入れば?

八神部隊長も待つてるとと思つよ？」

「ちょっと待つて下さいッス！！

心の準備が…。
」

「ほりほり入るよ。」

ブ

גַּם־עַמְּלָה

いざりやをしたくないが、

この人は鬼ツスか！？

「失礼します。」

俺放置だし……。

「何しとるん?

はよ入りいや。

「つかひ。

八神部隊長いつの間に……。」

「あんたが固まつとる間や。」

「ほらはよ入り。」

「失礼しますッス……。」

「ここ」の女性陣は何だかみんな強いッス……。

「なんか言つたか?」

「何も言つてないであります、サー。」

さらに元読心術のスキルもお持ちのようだ……。

「乙女のたしなみや。」

セコですか…。

まあといつあえざやの事を済ますシス。

「本日只今より、一ノ瀬真一等陸士。

機動六課へ出向となりますシス。

よろしくお願いしますシス。」

「はい。

よろしくお願いします。

そんでこの後の事なんやけど…。」

「それは私が説明するよ、はやて。」

「セツか?

「セツか?」

「うん。

これからなんだけど、まずはフォワードメンバーとの顔合わせ。

今後一緒に戦っていく仲間だから、どんな人がいるかは把握してもらわないといけないから。

その後にすぐに経験とスキル、コールサインを確認して訓練つて形になるかな。

何か質問ある?」

「一つだけ。

俺の訓練は自分個人で行つてもいいっスか?」

とりあえずサボりたいので…。

と心の中で付け足したのは秘密です。

「却下や。

これから対ガジェット…、もしかしたら魔導師戦があるかもしれへ

ん…。

そんな時に連携取れませんじゃ話にならん。

ビハビハしてしたいなら自主練でいい。

まあ明確な理由があるなら考へん」ともないけど…。

どうせあんたの事や大方サボりたいとかそんな理由やる。

なつ…何故バレたっすか…。

「バレいでか。

顔に出とったわ。」

「八神部隊長。

表情と心を読まないで欲しいッス！！

プライバシーの侵害ッス！！」

「ああ、あとウチの事ははやてでええよ。

そつちの方が年上やし…。

その代わりウチも一ノ瀬さんって呼ばせてもうりつな。

スルーッスか…。

泣きたくなるッス…。

「あつ、じゃあ私もフェイトでいいから。

私も一ノ瀬さんって呼ばせてもうりつね。」

フェイトさん！？

あんたもッスか！？

といつか俺順応早いッスね…。

これが原作知識の力ッスか…。

「もう勝手にしてくれッス…。

戦闘訓練もとりあえず出ますが、俺じゃ話にならないと思こまや
？」

「自分のレアスキル使えば何とかなるやん…。

ほなこれで終わらじやから、フォワードメンバーに挨拶に行き。

フエイントちゃん後お願いな。」

「うん。

はやてもお仕事頑張つて。

それじゃあ一ノ瀬さん。

行こうか。」

「了解っす。

とりあえず逃げ出す方法を考えないと…。

「一ノ瀬さん。

はやでからり通信繫がつてゐるみっ。『

『さうさう言い忘れたわ。

一ノ瀬さん…。

逃げ出そうなんて考へん方が身のためやで…。

そこんとこ覚えといてな…。』

「サー」了解したツスサー』

逃げ道塞がれたツス…。

episode 3 出向（後書き）

とつあえず出向まで書きました。

次はいよいよ前線メンバーと副隊長達が登場です。

どうなる事やら…。

感想をお待ちしています。

episode 4 戰闘訓練（前篇）（前書き）

ヒカルのワードメンバーと真の初対面

どうなるかとやら..。

それでは episode 4 戰闘訓練（前篇）始まります。

episode 4 戰闘訓練（前篇）

side 真

今俺はフュイト隊長に連れられて訓練場に向かってるんですけど……。

「あの～フュイト隊長?」

「やんと柴あさかわ、弓あやひないで欲しいっス。」

「却下です。」

「わからー、瀬さん、ずっと逃げよつとしてるじゃないですかー!」

「げっバレてるッス……。」

「せやでここあんなに言われてたじやないですか……。」

「なんでそんなに訓練嫌なんですか?」

なんだと言われても……。

ねえ……。

「嫌なものは嫌なんッスよ。

俺魔法使えないから、なかなかつらいんッスよ……。

空飛ばれたら、 もつびつじょうもないッスし……。」

「だからこそのチーム戦じゃないですか……。

そういえば一ノ瀬さんの戦闘スタイルって、 どんなのですか?

「デバイスが使えないから、 やつぱりクロスレンジ?」

「まあそこは説明が一度手間になるんで、 後で説明するッスよ。」

実際は何でも使えるつすけど……。

でもこんなとひりで宝具なんか使えないし……。

「いや、せやつぱり変態神父と子供も先生が使つ拳法にしてよひ……。

「一ノ瀬さんそろそろ訓練場に着きますよ。

「まーつとこになつて行きませよ。」

「はいはこつす。」

予定ではフォワード隊と合流するはずだつたんスけど……。

「あの～…。」

なんで俺は副隊長のお一方に睨まれてるんスかね……。

「お前が一ノ瀬か……。」

私はシグナム。

ライトニングの副隊長だ。

噂は聞いている。

お前がどうなるかが私は知らんが、他のメンバーを巻き込むなよ。」

うわ～。

なんか嫌われてるッス……。

なんかした覚えはないんスけど……。

まあ大方、「お荷物」の肩書が悪い方に取られてるんだと思うッス
けど……。

「あたしはヴィータ。

スターズの副隊長だ。

お前が何を考へてんのか知らねえけど、なんかあつたらあたしがぶ
つ潰すかんな。」

あ～隊長達と一緒にツスか…。

「うううとさしてジアス中將の隊から来たって事がネックになるんスね…。

「ヴィータ副隊長にシグナム副隊長?」

「なにか勘違いしてゐみたいツスけど、俺はスパイじゃないツスよ?」

「隊長達にもこのことは伝えてるツスよ?」

「口ではなんとでも言えるからな…。」

「まあ俺って感じに風体してゐるツスからね。

まあ信じられないのもしょうがないツスね。」

「自分で言つか…。

まあでもやつてこう」とだ。

スパイじゃない証拠を見せて欲しい。

でなければ信じられん。

この異動はおかしすぎるからな…。」「

「証拠ツスか…。

うーん。

まだ見せられないツスね。

まあ俺も姫さんを信用してないんで…。

姫さんが信用に足ると思つたら見せますよ。」「

ホントは信用してるんスけど…。

まあまだ言つべきではないでしょ…。

誰が聞いてるか分かんないツスし…。

「ほつ…。

意外に頭が切れるらしい…。

見方を改めよう。

「どうあれまずは信頼しておくれ。」

「おーおー…。」

「自分で言つていいなんなんつすけど、いいんスか?」

「ああ。」

「いずれは見せてくれるんだろ。」

「ならここれ。」

「敵わないツスね。」

「シグナムがやつたりつなり、あたしも向むかわねえよ。」

「あつがとつりやこますツス。」

「じゃあ今度は他のメンバーに紹介する。」

ついてこい。」

「はいッス。」

うお～。

見られてるッス…。

ガン見されてるッス…。

「みんなに紹介するね。

今日から機動六課に出向してきた一ノ瀬さん。

じゃあ一ノ瀬さん自己紹介を。」

「はいッス。

今日から機動六課に出向となつた一ノ瀬真一等陸士ッス。

みんなからしたらおっさんかもしないツスけど、仲良くなれて欲しくて
いツス。」

「おつかれさう。」

一ノ瀬さんはまだ26歳じゃないですか。

え、つと一ノ瀬さんはライトニング隊に所属になるからね。

エリオ、キヤ口挨拶して。」

「はい。

エリオ・モンティアル三等陸士です。

卷之三

h
?

呼び方かな？

「名前で呼んでいいっスよ。」

「それじゃあ真さん。

よろしくお願ひします。」

エリオってなかなかカツコイイつすよね。

いいな。

俺もカツコよく生まれたかつたツス……。

卷之二

キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。

「 真さん、よろしくお願ひします。」

「うんよろしくッス。」

キヤ口はあつとり系で癒されるツスね。

はつ
！
！

「ロ、ロリコンじゃないツスよ！！」

「断じて違うツスからね！！」

「それじゃあスタートーズも自己紹介しつか。」

「はい。」

スバル・ナカジマ＝等陸士です。

みひじくお願いします。」

スバルは…。

元氣つ娘つすね。

「ティアナ・ランスター＝等陸士です。」

「よひしくお願ひします。」

「ランスター？」

そつか…。

そういうやティアナってティーダの妹だったツスね…。

「 ようじべッス。」

「 それじゃあ一ノ瀬一等陸士。」

「 これから午後の訓練始めるんだけど…。」

「 準備はよろしいですか?」

うえへ。

やつぱりツスか…。

「 お腹が痛いので、見学…。」

「 却下。」

「ですよね〜。」

諦めが肝心ッスかね…。

「わかつたッス。

やるッスよ…。

たぶんすぐ撃墜されるッスよ?

あと高町隊長。

俺の事は普通に呼んでいいッスよ。」

「うん。

じゃあ一ノ瀬さんって呼ばせてもいいつよ。

私の事もなのはでいいからね。

「そういえば一ノ瀬さんはどんな戦闘方法なの?」

「まあストライカーアーツみたいな感じッスかね。」

「とにかくそれしかできないんスけどね……。」

「それってどういってんとですか？」

「こじでそれを聞くスか、スバルよ。

説明めんどくさいのに……。

この話も何回目ツスかね……。

「俺はリンクアーゴアが無いんスよ。

一応レアスキルがあるから魔導師登録になつてるんスけどね。

ところが訳で俺は魔法もデバイスも使えない落ちこぼれなんツスよ。」

「やつぱつ無言……？？」

「 「 「 「 「ええ~~~~~!」 「 「 「

「おつー!!

六重奏!!

「なにつー?」

「どうこいつことだそれー?」

「どうこいつこととも何もそのまんまツスよ、ヴィータ副隊長。

俺はレアスキルだけの魔導師って事ツス。

そのレアスキルも隊長達にはお見せしましたし、まあ多分今からの訓練にも使うツスよ。」

「ナウコウ」とだよ、ヴィータちゃん。

もし一ノ瀬さんの事が気になるなり、最初に軽く模擬戦してみる?」

「やうだな。

ところ訳だ。

一ノ瀬、相手をしろ。」

「嫌……。」

「拒否権は無いからな。」

「うへへ。」

泣きたいシス……。

「まあ、あたしに一撃入れたら終わりにしてやつから。」

「その前に撃墜されそつシス……。」

「じゃあ他のみんなは見学しどうか。」

じゃあ一ノ瀬さん頑張つてくださいね。」

「了解つす……。」

とりあえず1分は持たそつ……。

「一ノ瀬、覚悟しろよ。」

「これは死んだくさいッスね、俺……。」

episode 4 戰闘訓練（前篇）（後書き）

意外な長さ…。

疲れたッス…。

でも無事前線メンバー全部出せたし…。

良かった良かった。

次回はヴィータと真の模擬戦です。

戦闘シーン上手く書けるかな？

不安しかないですが、頑張ります。

episode 5 戰闘訓練（後篇）（前書き）

PV400000アクセス突破

ユニーク5000突破

ありがとうございます！

とても稚拙な文で自分の才能の無さを痛感していますが、それでも多くの人がこの小説を見ていただいている事に大変幸せに思っています。

非才の身ではありますが全力で頑張りますので、見守つていただければ幸いです。

そしてジント様

コメントありがとうございます。

とても励みになります。

これからも見守つていただけすると幸いです。

それではepisode 5 戰闘訓練（後篇）始まります。

episode 5 戰闘訓練（後篇）

side 真

なんで俺はこんなとこにいるんスかね…。

「うむ、わざと構えろ…。」

「うわあ…。

ヴィータ副隊長、殺る気満々スよ…。

バリアジャケットも装備してんし…。

無理っすう…。

「二ベゼー…。」

「お手柔らかにッス。」

とつあえずは絶対回避ッスね。

あれを食らったら一撃で終わリッス。

「うひあああああ

デゴーン

「ちつ…避けたか。

どこの行きやがった。」

「ルリッス…よつーー。」

影の【ゲート】でヴィータ副隊長の影に移動し、声をかけながらそのまま垂直に蹴り上げる。

「ぐる」。

「」の二

蹴り上げられたウイータ副隊長は俺の方を向くが、すでにそこには誰もいない。

「どこ見てんスか?

「つちツスヨツト！」

二二七

蹴り上げたヴィータ副隊長の後ろに跳びあがり、そのまま蹴り飛ばす。

シード・ゴーン

うわっ予想以上に飛んじゃったツス…。

まあ大丈夫ですよ。

プロテクション張つてたみたいツスし…。

こんだけやれば文句は出ないツスよね。

そろそろやられるとするツスか…。

魔法弾に当たつて撃墜されればいいツスよね…。

「やるじやねえか、一ノ瀬…。

正直舐めてた…。

こつからまジで行く…。

いくぞアイゼン…！

「フォルムツヴァイ…！」

えつ…。

ちゅつ、ヴィータ副隊長！！

なにを言つてゐんスか！？

「ラケーーン…ハンマーアアアアアア…！」

「ザザザザザザザザザザザザザザ…！」

「ふむ。

一ノ瀬は使えるな。

魔法は使えないが、あのスキルとストライクアーツはなかなかのものだ。」

今は模擬戦後の反省会をしているツス。

模擬戦はどうなつたかつて？

そんなのヴィータ副隊長にぶつ叩かれて撃墜しましたけど？

死ぬかと思ったツス…。

「ああ、あたしもびっくりした。

なんでお前落ちこぼれなんて言われてたんだ?

普通の魔導師なら、簡単にやれるだろ?」

「戦うの疲れるんで戦闘訓練はサボってたツス。

まあ、かと言つてテスクワークもしないんスけどね。」

「はあ~。

お前なあ…。」

「あはは…。

まあ一ノ瀬さんの実力も分かつたし、早速チームでの訓練に入ろうつか。」

えつ…。

マジッスか？

俺今模擬戦終わつたばっかなんスけど…。

「あの～休憩とかは…？」

「さて行くよ～。」

「スルー！？」

泣きたいッス…。

「あつあのーー！」

「うん？」

スバルが声をかけてきたんスけど…。

なんでそんなに緊張してんスか？

「あつ、あたしにストライクアーツを教えて下せーーー。」

「なんで俺なんスか？」

「せつしきのガイータ副隊長との模擬戦を見て、すげこって思つたんです。」

「私なんかとは技術からして違つて……。」

「ノ瀬さん【ストライクアーツ】を教わればもっと強くなれるって……。」

「だからお願ひしますーーー。」

「そんないしたもんじゃなーいっすけど、断るツス。」

「めんどくせーーー。」

「せつそうですか……。」

「ヒヤウのせ[冗談で……。」

スバルにはまだ先にやる事があるッスよ。

それが出来たらもう一度来るッスよ。

その時にはスバルが強くなるお手伝いをするッスよ。

「はつはいーーー！」

頑張ります。」

ああ～あんなにほしゃこじゅつて……。

若いつていいつすねえ……。

「おー、一ノ瀬。

早く来いよ。」

「はいはー。

今行くッスよ……。」

さてと…。

年寄りの俺も頑張りますッスかね…。

episode 5 戰闘訓練（後篇）（後書き）

初戦闘シーン！！

テラ難しいッス…。

そして作者の戦闘シーンのへたくそ加減が半端無いッス。
精進します…。

episode 6 ファースト・アラート（前書き）

タイトルが思いつかなかつたツス…。

すいません…。

さらには更新も遅れてしまつて…。

重ね重ねすいません…。

そしてドナドナ様

烈火の祝福様

無添加○様

コメントありがとうございます。

いたいたコメントを励みにして頑張ります。

それではepisode 6 ファースト・アラート始まります。

episode 6 ファースト・アラート

side 真

「はい。せいいれ～つ。」

「はい～。」

「おっ、やっと終わったッスね。」

「「「「はあはあ～。」」」

「うわ～、皆ボロボロッスねえ～。」

「なのは隊長容赦ないッスからねえ～。」

「俺？」

「俺は結局、副隊長並みには戦えるとこを見せたので自主練になつた
ッス。」

なのは隊長からのお願いで、もつもつとしたストライクアーツの教導もしないといけないッス。

俺、教導官の資格持つてないッスけど…。

いいんスかね…？

「じゃあ本日の早朝訓練ラスト一本。

皆、まだ頑張れる?」

「「「「は」」」」

えつ、まだやるんスか?

なのは隊長…。

鬼ッスね…。

とにかくあの子らも良くやるッス…。

これが若さッスかね…。

「アクセル…シューート…！」

「どわつ…！」

なのは隊長、なにするんっすか…？」

今鼻先掠つたツスよ…！」

「今失礼なこと考えたでしょ…。」

「ウゲツ、何故バレタツス…！」

「カタコト…？」

といふか今肯定したよね…。

一ノ瀬さん…。

午後の訓練、私と模擬戦ね。

拒否権は無いから。」

「う、すいませんス…。

それだけは勘弁して欲しいス…。」

「ダメ。」

「うわ、今日は俺の命運にこなス…。

「せん氣を取り直して、ショートバイベースをやるよ。

レイジングハート。」

「ail riot

axel shooter」

「うわあ、ここでショートバイベースに入りますか…。

『愁傷様つす…。

「私の攻撃を5分間、被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。

誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。

頑張つていこう。」

「「「「「せ—..」」」」

条件もなかなかきついツスね。

新人たちはどう乗り切るツスかね…?

۱۰۸

「無い！」

「同じくです。」

「じゃ、何とか一発当つよ。」

「はい。」

「よーし。

行くよ、エリオ!!!」

「はい!!!

スバルさん!!!」

ふむ。

回避は無理、クリーンヒットを狙う…か。

自分たちの状況と実力が分かつてゐるみたいッスね。

しかしながら隊長に一発当てるのは簡単な事じゃないッス。

どう動くのか…。

見物ッスね。

「準備はOKだね。

それじゃあ…。

ペタペタ…「一…」

「全員絶対回避!!

2分以内で決めるわよ…」

「…「おひ」「」」

ドローン

結局最後はエリオがなのは隊長にクローンヒットをされ、ショートイ
ベーションは終わった。

しかしながら面白いものが見れたッス。

今後の参考とさせてもらひッスよ。

「さて」Jで一ノ瀬さんにも、感想を聞こうかな。」

「え？」

「俺ツスか？

参考にもならないと思つんツスケビ……。」

「いいからいいから。

何でもないことでも、参考になつたりするし。」

「やうツスか？

じゃあまずはスバル。

まだまだ攻撃が粗いっすね。

大振りが目立つツス。

そこはおおい直していくツスよ。

あとは回避アクションとリカバリーツスね。

この辺も個別の時にもするツス。

まあスバルのクロスレンジの爆発力は凄まじいものを持つてるツス。

だから確実にそれを当てるようにするのが今後の課題ツスね。」

「はい！！

分かりました。

ありがとうございました！』

「次はティアナツスね。

でも俺は近接専門みたいな所があるから、そこはなのは隊長に聞いた方がいいツスね。

とりあえず俺から言えるのは武器を変えなさいって事ツスね。

さすがに実戦で弾詰まりとかは洒落にならないツスから…。

後はさすがに長年一緒にただけあってスバルとは息ぴったりだったので、さすがと思つたツス。』

「 えのもあつがとへりぞれこまか…。」

なんだかスバルと名「ノンビ」と言つたら微妙な顔したツス…。

今までに何があつたんスかね…。

「 ハリオとキヤロはあすきて突つ込めないツス。

体の「」とありますし、技術面もツスね。」

「 わつですか…。」

「 ありがとうございます…。」

あいら。

落ち込んじゃつた。

そんなつもつで言つた訳じゃないんつすけどね…。

フォローしつかないと…

「落ち込む必要はないッスよ。

ヒリオとキャラはまだ成長期ッスから。

出来てなくて当たり前の「」とも同じッス。

やつべつ出来るよになれば良こんスよ。

今ヒリオ達が出来るのは自分の「」バイスをちゃんと扱えるよつこな
るヒツスよ。

今は振り回されてるのが見て取れたッスから。

それに慣れるつすよ。

それが出来るよになつたら、またアドバイスするッスよ。」

「はいっ……」

「分かりました。」

「「」んな所で良いッスか?」

自分が並べる「」と並んでいた「」。スケビ…。

「あつがどり」でこます。

翻ひがや ふと見てくれていてのが分かりました。」

「わい。

やの間に方はひどくないッスか?」

「」やせば。

わい。

チーム戦にもだいぶ慣れしてきたね。

ティアナの指揮もだいぶ筋が通つて来たよ。

指揮官訓練受けたみる?」

「いえつ…あの…戦闘訓練だけでこいつぱにこいつぱにです。」

「あははは。」

「 も々～？」

「 も々～る～。」

「 フヨード？」

「 どうしたの？」

「 なんか焦げ臭いような…。」

確かに…。

変なにおいがある…。

「 あ～…」

スバル、あなたの口～フ～…。」

「 ふえ？」

バチツバチバチツ

あ～あ。

あんな無茶するからッスね…。

「うわうわばつ…」

あつちや～。

プシュー

「しまつた～。

無茶させちゃつた～。」

「オーバーヒートかなあ？」

後でメンテスタッフに見てもらおう。」

「はい…。」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はーー。」

だましだましです…。」

「皆訓練にも慣れてたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替
えかなあ…。」

「新…。」

「デバイス?」

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まらうか。」

「…はー。」「…」

「ん?」

あの車つて……。

うおつ、かつこい車…。

いいツスね。

あんな車乗りたいッス。

あれ、あの車に乗ってゐる、うて、

「ハイトさん！」

八神部隊長！！

「うん。」

「」

「おーい！」

「これ、フェイト隊長の車だつたんですか！？」

「そうだよ。

地上での移動手段なんだ。」

「いい車ツスね〜。

俺も車好きツスから、うらやましいツス。」

「そうなんだ。

今度運転してみる?」

「いいんスか!?

ありがとうございます。」

「それよりみんな、練習の方はどうないや?」

「ノ瀬さんもしっかりやつとるんやろな?」

「あ…えへへ…。」

「頑張つてます…。」

「俺もひやごとやつてゐるシスよ。」

「ほんまか～？」

「サボつとつたら…。」

「わかつとるな…。」

「も、もぢりんシス…。」

「怖いシス…。」

「怖いシスよ…。」

「それよつエリオ、キャラゴ～めんね。」

「私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて…。」

「あつ…。」

「いえ、そんな…。」

「大丈夫です。」

「4人ともいい感じで慣れてきてるよ。

一ノ瀬さんも私じゃ教えないクロスレンジのアドバイスとかしてくれるし…。

いつ出動があつても大丈夫。」

「そうか。

それは頼もしいな。」

普普ツ、皆照れてるツス。

こういうの何か新鮮ツスねえ…。

「2人はどこかにお出かけ?」

「うん。

「ちょっと6番ポートまで。」

「教会本部でカリムと会談や。

夕方には戻るよ。」

「私は昼前には戻るから…。

お昼は昼で一緒に食べようか。」

「「「「はー。」「」「」

「ほんならなー。」

ふう、さつぱりしたッス。

訓練の後のシャワーは格別ッスねー。

「真さん…。

あの…。

お兄ちゃんって呼んでもいいですか…？」

「ブブッ…！」

「じまつ、げほつ…」。

「いきなりじりしたんスか…？」

「あー、すいません…」。

迷惑でしたよね…。

「忘れてください…」。

「こや迷惑じやないシスケバ…」。

「とつあえず理由を聞きたいシス。」

「せつきの朝の訓練でアドバイスしてくれた時に、なんかお兄ちゃん
みたいだな～って…」。

「僕兄弟いなかつたから…」。

そういうのひょっと憧れてて…。」

なるほど…。

幼い頃から甘えられなかつた反動ツスか…。

男の子は異性にはちよつと遠慮しけりやつ節もあるし…。

エリオは特に大人の中で育つてきたから、精神的にませてゐし…。

まあ、まだ10歳ツスしね…。

「なるほど…。

まあ、こんなのでよければ兄になつてもいいツスよ。」

「ほんとですか！？」

「ありがとうございます！！」

「ほらほら。

兄弟なんスから、堅苦しいのも無しツスよ。

節度は守らなことだけないツスケビ、今はそんな時でもないツスよ。

「

「うそ。

お兄さん。」

なにこの純粹な生き物…。

フュイト隊長が溺愛するのが分かる氣がするツス…。

いや眞っとくけど、俺にそんな趣味は無いツスよ…。

いやマジで…！

「お兄さん、どうしたの？」

「い、いや…？」

「でもないツスよ…？」

「？？

「 そ う な の ？ ？ 」

「 当 然 ツ ス。 」

「 お 兄 さ ん が そ う こ う な ら そ う な ん だ ん ね。 」

「 そ う こ え ば 、 皆 遅 い ね ？ ？ 」

「 ま あ 女 の 人 に は い り い ろ あ る ん ス よ。 」

「 黙 つ て 待 つ の も 男 の 仕 事 ツ ス よ。 」

「 は い。 」

「 お 兄 さ ん。 」

「 ふ う。 」

「 な ん と か ご ま か せ た ツ ス。 」

「うわ～。

これが…。」

「あたしたちの新デバイス…ですか？」

「そうです。

設計主任あたし。

協力なのはさん、フュイトさん、レイジングハートさんとコイン曹長。」

元気よく説明するのはシャーリー。

本名は忘れたッスけど、フュイト隊長の副官ッスね。

「はあ…。」

これが皆の新デバイスッスか…。

「ストラーダとケリュケイオンは変化無しかな…。」

「ストラーダとケリュケイオンは変化無しかな…。」

「うん。

「うなのかな…。」

「違いま～す。」

「あつ…。」

「変化無しは外見だけですよ?」

「コインさん。」

「はいです〜。」

2人はちゃんとしたデバイスの使用経験が無かつたですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです。」

「あれで最低限……。」

「ホントに……？」

あれで最低限ッスか……。

この世界のデバイスもいい加減チートだと思つッス……。

子どもでも真空波起こせるし、機械切れるし……。

「皆が扱う事になる4機は六課の前線メンバーとメカニックスタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型！！
部隊の目的に合わせて。

そしてエリオやキャロ、スバルにティア。

個性に合わせて造られた文句なしに最高の機体です。

この子たちはまだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められてて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです。

ただの道具や武器と思わないで大切に……。

だけど性能の限界まで思い切り全開で使ってあげて欲しいです……。」

「うん。

「この子たちもね、きっとそれを見たでるから。」

「まあ、あんまり頼りすがるものだめっスけどね~。」

「あ~真さんひがみですか?」

「だつたらなんっスか?」

そういう生意気な口は俺から一本取つてから言つもさっスよ、スバル!!」

「お、ここつのはつぺた柔らかいっスね~。」

「こひやいこひやい~。」

「「」あんじめん。」

おまたせ～つて一ノ瀬さん何やつてるの?」

「なのはせ～ん。」

「ナイスタイミングです。」

ちゅうじこれから機能説明を…。」

「なのはふあ～ん。ふあふふえふえくあは～い。」

「スバル…。」

何言つてゐるのか分かんないよ…。」

とりあえず話が進まないから、一ノ瀬さん離してあげてくれません
か?」

「しょうがない…。」

なかなか面白かったんすけどね…。」

「ほれッス。」

「ハハハ～。

痛い…。」

「スバル、どうしたの？」

「スバルが真さんを茶化したから、お仕置きされたんですよ。」

「いややは…。」

「それはスバルが悪いかな…。」

「当然ッス！！」

「そろそろ機能説明してもいいかな？」

「ああ～」めんねシャーリー。

「もつすべで使える状態なんだよね？」

「はい！」

なんであんたが答えるんスか…。

リン曹長？

「まず、その子たちみんな何段階かに分けて出カリミツタかけてるのね。

一番最初の段階だと、そんなにびっくりするほどパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていいって。」

「で、各自が今の出力を扱い切れるようになつたら、私やフェイト隊長。

リーン・セザンヌ。

それにそこには、一ノ瀬さんの判断で解除していくから。」

גַּעֲמָנָה - ?

俺もつすか？

聞いてないツスよ！？」

「それこりこりとは早めに言つて欲しいッス…。

「クロスレンジの教室になつたんだから、やつてもらいますよ。

簡単ですよ。

「この子たちが次のステップに進んでいいと思ったら、その時ですか
い。」

「まあ頑張るッスよ…。」

「とこりこりです~。」

「簡単にはいえみんなはこの子たちと一緒にレベルアップしていくよ
うな感じですね。」

「あつ、出力コマッターって言つと、なのはさん達にもかかってま
すよね?」

「ああ、私たちはアバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね。」

「「「「えつ。」「」「」」

「コリッターですか？」

「能力限[定]って言つてね。

「うちの隊長と副隊長は皆だよ。

私とフロイト隊長。

シグナム副隊長とヴィータ副隊長。

「せめてちゃんとですね。」

「うう。」

「ううううスよね。

こんだけエースが集まる部隊なんスかひ。

「え~と…。」

「まあ。

部隊「」とこ保有できる魔導師ランクの総計規模つて決まつてゐるじゃない。」

「あ、あはつ…。

やつですよね…。」

「1つの部隊でたくさん優秀な魔導師を保有したい場合は、そこにつまく収まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ。」

「まあ裏技つちやあ裏技なんだけどね。」

「ウチの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達はだいたい2ランクダウンかなあ。」

「4つ…。

ハ神部隊長つて5つランクのさずだから…。」

「Aランクまで落としてるんですか?」

「はやてちやんもいろいろ苦労してゐるですか。」

「なのはさんは……？」

「私はもともと1+1だつただから2・5ランクダウンでAA。
だからもうすぐ1人で皆の相手をするのはつらくなつてくるかなあ。

その時は一ノ瀬さん一緒にやりましょうね？」

「うえつ。

また俺ツスか？

無理ツスよさすがに……。

4人相手はきつこツス。」

「だから4対2でやるんじゃないですか。」

「それでも無理ツス……！」

ホントに鬼しかいないんスかここは……。

「ところの具合に」隊長わんたんひま、はやひりやんの。

はやひりやんは、直接の上司のカリムさんか部隊の監査役、クロノ提督の許可が無ことコノリッター解除ができないですしこう。

許可は滅多な」とでは出せないやつです。」

「やうだつたんですね……。」

「まあ隊長達の話は心の片隅へりこでここよ。

今は皆の「バイスの事。」

「はー。」

「はー。」

「新型も皆の訓練データを基準にして調整してるので、いきなり使つても違和感ないと思つんだけどね……。」

「午後の訓練の時にもテストして、微調整しようか。」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどからな」と思っています
よ。」

「ふう、便利だよね最近は……。」

なのは隊長……。

それはひょっとおぼれん……。

「今失礼なこと思わなかつたかな?」

一ノ瀬一等陸士?」

「いえ……

そんな」とは決して……。」

「ほんとかなあ?

今すつ”い失礼な事言われたよつな氣がしたんだけどなあ……。」

怖いツスよなのは隊長。

「まあいいや。

今日は見逃してあげるよ…。

次言つたら〇 H A N A S H I しようね…。」「

「サーイエツサーーー！」

マジで死ぬかと思ったツス…。

「そ、そうだ。

スバルの方はリボルバー・ナックルとのシンクロ機能も上手く設定出来てるからね。」

「ホントですか！？」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能も付けた。」

「

「うわ～。

ありがとうございます。」

ブーブーブー

「」のアーティスト。

「1級警戒態勢！？」

「グリフィス君！！」

『はい。』

『教会本部から出動要請です。』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。』

『やめなさい。』

「うん。」

『状況は?』

『教会騎士団の調査部で追つてたレリックらしきものが見つかった。』

『場所はエイリム山丘陵地区。』

『対象は山岳リニアレールで移動中。』

『移動中って……。』

『まやか……。』

『りや、ガジェットに襲われてるって落ちッスね……。』

『俺の出番はなあつッス……。』

『そのまさかや…。

内部に侵入したガジェットのせいで、車輛の制御が奪われる…。

リニアレール内のガジェットは最低でも30体。

大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしねへん。

いきなりハードな初出動や。

なのはちやん、フロイトちやん行けるか?』

『私はいつでも…。』

「私も。」

『スバルにティアナ、ヒリオ、キャロ!!

ついでに一ノ瀬さん。

みんなもOKか?』

「…はい。」「…

「ついでって…。

確かに役立たずだけじゃあ……。』

泣こむやつ。スヨ俺。

『よし……』

若干一加を除いていいお返事や。

シフトは△の3。

グリフィス君は隊舎での指揮。

リインは現場管制。

『はい。』

『はい。』

『なのむりやん、フロイトりやんは現場指揮。』

『うん。』

『ほんなら…。』

機動六課フォワード部隊出動…!』

「「「「「「はい。」「」「」「」「」「」」」

『了解。』

皆は先行して。

私もすぐに追いかける。』

「うん。』

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈
夫だからね。』

「はい。』

「頑張ります。」

「Hコオとキヤロ、それにフコードもしつかりであります。」

「せこ。」

「せこ。」

「あらへへ。」

「危ない時ね私やフローハイテク隊、ロイインがけやんじフローハーするか

が。

おつかなびつへつじやなへへ、彌二つやつせつてみよつ。」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「 」 「 」

「 」 「 」

「 」 「 」

「真さんはどうするんですか？」

「俺はヘリで待機ッス。

皆が危なくなつたら、俺のスキルで助けに行くッス。

それにガジェット相手だと俺、歯が立たないッスから……。」

「それだけでも安心して戦えます。」

「ようじくお願ひします。」

「俺泣いてもいいッスかね……。」

「始めて人に頼られた気がするッス……。」

「つてありや……。」

「キヤロの様子が……。」

「なんか不安そうッスね……。」

「まあ初出動だし、この子の過去を考えたら不安にもなるッスよね……。」

はてさて無事に行くといいんスけどね…。

episode 6 ファースト・アラート（後書き）

遅くなってしまったことをません。

何回か書きなおやうとして長くなってしまった…。

めつむや 脳に入るシス…。

そして初。

アニメを見ながら書きました。

なので無理やり押し込んでる感がダダ漏れです！！

やつぱり作者はオリジナルストーリーを書く方が気楽ですらり行ける気がします。

次回は指摘がありましたので、ちょっとチャレンジと言いますか、地の文を「つす」口調ではなくしていじつと思します。

やつしたら第3者の目線で話が進みやうな…。

まあ何事も挑戦！！

やつてみるとが大事ッスよ…。

つきましてはアンケートを取りたいと思います。

今までの「つす」口調の完璧主人公目線の地の文。

はたまたおやじへ第3着用線になるであろう地の文。

“ひひが読みやすいか…。

感想とともにコメントいただけたら幸いです。

では次回でお会いしましょう。

すいふんと更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

いろいろ考えてこるのでですが、そこに繋げるまでがつまらなくて、ずつこんなに遅くなってしまいまして。

「こんな展開にしようなどはだいぶ決まっているので、これからはなるべく早く更新しようと思います。

そして1000000p.v突破！！

ユーティモ10000突破！！

あいかどハ「」ヤレラホア!!

最初はこんなに見てもらえたとは……な感じでした

次回にでも10000000円以上&100000円一ヶに感謝して外伝を書こうか等愚考しております。

これからも是非魔法少女リリカルなのは～お荷物と呼ばれた男～をよろしくお願いします。

それではファースト・アラート sideはやて始まります。

si deはやて

ウチはフローリちゃんの車に乗せてもう一つの番ポートに向かって
いる。

理由は…。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官…。

カリム・グラシアさんかあ。

私はお会いしたこと無いんだけど…。」

フェイントちゃんの言っていたカリムに会ったわ。

「ああ、やつやつたねえ。」

「うふ。

はやじはこつから?」

「うへん。

私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかの頃のはずやから……。

8年ぐらい前かなあ。」

「そつか……。」

「カリムと私は信じてるものも立場もやるべき事も全然ちやうふんやけど……。

今回は2人の目的が一致したから……。

そもそも六課の立ち上げ、実質的な部分をやってくれたのはほとんどカリムなんよ。」

六課の立ち上げのために奔走した時のことを思い出す。

「うへん、ほんまにお世話をになつたなあ……。

「やうなんだ。」

「おかげで私は人材集めの方に集中できた。

1人余計なんも来たけどな……。」

なにかにつけてはサボるつとするからなアイツ……。

「あはは……。

えへと信頼できる上司つて感じ?」

「うへん、仕事や能力はすごいんやけど、あんまり上司つて感じはせえへんなあ……。

どつちかつていうと、お姉ちゃんつて感じじゃ。」

「あはは。

そつか。」

「まあレコック事件が一段落したひ、ちやんと紹介するよ。

わっと氣が会つよ。

フロイドちやんもなのはちやんも。」

「うん。

楽しみにしてる。」

聖王教会の本部に着いた私はすぐにカリムの部屋に通された。

「カリム、久しぶりや。」

久しぶりに会う姉替わりの人に挨拶をする。

「せやで…。

「じりじしゃー。」

笑顔で迎えてくれるカリム

やつぱりお姉ちゃんやなあ。

ウチはテーブルに着き、出してもらった紅茶を一口飲んでから話しが始める。

「いめんなあ。

すっかり「無沙汰してもうて…。」

「気にしないで。

部隊の方は順調みたいね。」

「えへへ、カリムのおかげや。」

「うふふ。

そうこういふことじとくと、こりこりお願いもしやすいかな。」

「あはは。

なんや、今日の会話で話すはお願い方面か?」

カリムにはお世話になつたし、やぶさかではないけどな。

「はあ……。」

ため息をついてパネルを操作するカリム。

暗幕まで引いて……。

見せたい映像もあるんかな?

とつあえず出てきた映像を見てみよ。

つてこれ……。

「これ、 ガジェット……。

新型？」

「今までの?型以外に新しいのが2種類……。

戦闘性能はまだ不明だけど……。

これ……。

?型は割と大型ね……。」

カリムの出してくれた人型と比較する。

確かに大きいな……。

「本局にはまだ正式報告はしていないわ。

監査役のクロノ提督には触りだけお伝えしたんだけど……。」

「「」れは……！」

ウチの目に一つの映像が止まる。

「これが今日の本題の一つ……。

一昨日付けでミシーチルダに運び込まれた不審貨物……。」

「レリック……やね。」

「その可能性が高いわ。

？型と？型が発見されたのも昨日からだし……。」

「ガジェット達がレリックを見つけるまでの予想時間は？」

これが分かるのと分からぬのとではえらい差が出る。

早めに対処せんと……。

「調査では町ければ今日明日。」

「せやけどおかしいな…。

レコックが出ていくのがちよお町こよひな…。」

「それが本題のひとつ。」

かの翼をもぎ取る者ね。

その人に関する新たな情報が分かつたの。」

「なんやて…！」

予言に出でこたあの…？」

「ええ。

それも昨日よ。

関係があるとしか思えない。」

確かにそれは怪しいな……。

「なあカリム。

それはどんな情報なん?」

「はやては三提督直属の部隊は知ってるわよね。」

「当然や。」

あの人知らん人は管理局におらんやろ。」

三提督直属特別遊撃部隊 LAST CARD — 『最後の切り札』。

その唯1人の隊員『刹那の処刑人』。

こんだけしか情報はないけどな……。

極秘事項やし……。

まさか……。」

「ええ。

彼がそうみたいね……。

予言に全て該当する……。」

「彼って……。

男の人なんか？」

「そうよ。

昨日//ゼット提督とお話ししたのだけれど、その時に教えていただいたわ。」

えつ……。

それって極秘事項ちゃうの？

「確かに驚くわよね。

//ゼット提督が言つては、近いところ彼は表で活動するやつよ。

それがいつかは分からぬいらじこのだけれど……。」

「ええ~!~」

「だから私には早めに情報を開示してくれたらうれしいわ。
はやてに話すことでも了承してくれてる。」

「なるほど……。」

「一昨日モモーラー越しでお話をせてもらつたの。

ガジェットを造るぐらーの科学者なら盗聴できるかも知れない……。

もしかしたらこの事を聞いて動いたのかも知れない……。

ちゅつと辻闊だつたわ……。

はやてはどつ思つて。

これをどう判断すべきか、どう動くべきか……。

そのことを聞きたかったの。

レリック事件もその後に起るはずの事件も対処を失敗するわけにはいかないもの……。」

なるほど……。

そのための相談やつたんやな。

でも何とかなる。

何とか出来る。

そのための六課や。

まずはカリムを安心させんとな…。

そう思いパネルを操作して暗幕を開ける。

「つー！」

はやて？

「まあ、何があつてもきっと大丈夫。

カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。

即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。

予想外の緊急事態にもちゃんと対応できる下地が出来てる。

そやから大丈夫！！」

そうきっと大丈夫や！！

1人例外はあるけどな…。

久々に書きました。

以前指摘があつたので地の文を少し変えてみよつとやつてみたら、見事に失敗しました。

作者の文才ではこれが限界でした。

すいません。

「めんなさい。

また折を見て挑戦しようつと思ひますが、それまで「容赦を…。

それではまた次回お会いしましよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414p/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～お荷物と呼ばれた男～
2010年12月10日02時23分発行